「アフリカの真珠」ウガンダより　　2025 年（令和 7 年）12 月

12 月は様々な分野の方の来訪が続き、また筆者も国内出張がありました。

以下にご報告します。

１.「福岡方式」　松藤福岡大学名誉教授チームの来訪

どのような規模の都市であれ現代社会で人間が生活する以上廃棄物が出ます。廃棄物をどのように処理するかは行政当局にとって極めて難しい問題です。ウガンダも例外ではありません。大都市カンパラの廃棄物処理は頭の痛い問題です。公共サービスですべての廃棄物を回収、処理することはできず民間業者等も入って指定された廃棄場で埋め立てを行っているのが実情です。

昨年 8 月、カンパラ郊外で季節はずれの大雨が降りました。カンパラの中心部からさほど遠くないキテジという廃棄物処理場にも集中豪雨がありました。その結果高く積み上がった廃棄物が崩れ落ち周辺の住宅地に崩れ落ちる事故がありました。多数の死者、行方不明者を出す事態となりました。

私は崩落事故の直後に現場を視察しましたが、極めて厳しい状況でした。

日本には「福岡方式」と言われる廃棄物処理の方式があります。これは、自然の力を利用し廃棄物を分解する非常に環境負荷の低い工法です。この優れた工法を活用すべく大使館から要請を行い緊急性の高い案件として実施が認められました。「福岡方式」は福岡に事務所を持つ国連ハビタットが長く協力を行っています。アフリカではエチオピア、ギニア・ビサウなどに続いて 6 カ国目の実施となりました。

今月「福岡方式」の考案者であり実施も手がけておられる松藤康司福岡大学名誉教授がチームを率いてキテジの現場を訪問されました。重機も入れて実地の指導に当たられました。崩壊部分のうち 4.3 ヘクタール（全体の約３割）を改修、地滑りやメタンガス爆発などによる被害を予防することを目的とした工事です。

松藤教授はアフリカのみならず中南米、東南アジアなど長く現場を指導されて来ました。廃棄物処理場にはゴミを拾う人たちが集まって来ます。回収作業員と摩擦を引き起こすことも珍しくありません。教授は彼らにも直接意思疎通を図り時間をかけて作業の理解者、協力者に変えていきます。

松藤教授は作業を開始する前にもウガンダを来訪され工法に必要な素材を形成するウガンダ人のスタートアップと関係を構築されました。今回の現場にはこのウガンダ人スタートアップが早くも機材を据え付けていました。松藤教授のチームの指導を受けて崩落の現場は忽ち姿を変えていきます。様子を見に来ていた付近の住民もその作業の手際の良さに本当に目を丸くしていました。

目標として 5 年程度の時間をかけて廃棄物処理場を緑地に変えていく計画です。大使館としても支援を継続したいと考えています。

［昨年８月崩落直後の様子］

［松藤教授の指導］

２．ウガンダ鉄道網の再建

19 世紀植民地下のウガンダ(東アフリカ)では世界で当時最も先進的な鉄道が運用されていました。東アフリカでは鉄道のほか、共同航空会社や郵便システムさらに共通の通貨まで運用されていた事は以前このコラムで紹介しました。(本年６月号)

現在ウガンダ政府は内戦などで荒廃してしまった鉄道網のリハビリ工事を進めています。今月筆者はウガンダ東部のソロティーからケニア国境に近いトロロまでを縦断し現在のリハビリ状況を視察してきました。

現在改修が進んでいる部分はメーターゲージと呼ばれる軌道の部分です。東アフリカ鉄道はケニアから入りウガンダを縦断していました。トロロを分岐点として、SGR(標準軌鉄道)はカンパラまでそしてメーターゲージは北西部に伸びていました。メーターゲージ部分は全長 350 キロ以上ありますが、そのうち 150 キロ程度が既に修復されています。来年前半にはグルまで完成させるとのことです。

［リハビリが終了している部分］

植民地時代の駅舎が残っている駅もあります。枕木には植民地時代のものを再利用している部分もあります。インフラの整備は急ピッチに進められていますが課題は運用体制です。運行計画や運転士技術士の育成はこれからです。鉄道網の修復では、ウガンダは東アフリカのケニア、タンザニア遅れをとってしまっています。この三か国を鉄道でつなぎ、さらに内陸の地域へと延伸する事は東アフリカ発展のカギとなると思います。

［トロロ駅：ケニアからウガンダに入りさらに内陸に進む要衝。植民地時代からの駅舎］

３．ケニア・ウガンダ国境の視察

鉄道視察に続き、筆者はケニアとの国境の街であるブシアを訪問しました。

筆者はこれまで外務省勤務で多くの国境を見てきました。二つのコーズウェーで繋がれたマレーシア・シンガポール国境。製造業を中心に統合された米・メキシコ国境。発展の格差の中で域内統合を進めるメコン諸国の国境。多くの人とモノが行き交う国境を見てきましたが、ブシアはその中でもかなり活発な国境でした。

ケニアからウガンダへは 1 日 1400 台のトラックを中心とする車両が流入してきます。国境を管理する税関当局はトラックのスキャナーを最近導入しました。ケニア税関とは日々密接に協力しています。

通関業務の効率化は東アフリカ共同体形成の重要な部分です。大量の物資の行き来を裁くため、IT 化はかなり進展していると感じました。東アフリカ共同体では、Single Customs Territory という制度があり、東アフリカ共同体の何れかの国に輸入された物品の関税情報が東アフリカ共同体内で電子的に共有される仕組みになっています。ただしまだ充分ではありません。さらに国境を通過した後の国内交通網の整備も重要でしょう。複数の運搬方法を活用するマルチモーダルを進めていく必要性を痛感しました。トラックを中心とする車両、現在整備されつつある鉄道、ビクトリア湖の水運の活用。さらには航空機による輸送もあるでしょう。

東アフリカ共同体の統合を進展させるためには連結性(コネクティビティー)の向上は不

可欠です。鉄道網と税関はその重要な構成要素です。今回視察したものはこの地域の発展のためには不可欠な部分です。日本はこれまでもアセアンの統合など、日本経済にとっても重要な経済統合を後押ししてきました。将来、日本の重要なマーケットとなり得るこの地域の連結性を高める事は、日本経済の発展にも大きく寄与すると思います。

[列をなす車両（ケニア側、平均５㎞]

[貨物内部を確認する電子スキャナー]

４．ユンベとマニベを結ぶ道路建設工事

筆者は今月西ナイル州のユンベ、東部のアタリに出張しました。この地域には昨年 6 月にも訪問しています。

日本は JICA を通じてこの地域の国道の改修を行っています。西ナイル地域はウガンダ国内情勢の混乱(イディ・アミン将軍によるクーデターやブッシュ・ウォーと呼ばれる内戦)により深い影響を受けた地域です。鉄道の項でも述べましたが内戦では相互の連結を断ち切るため、物資輸送網が切断されてしまいました。内戦終結の合意がなされたのは 2002 年のことです。さらに 2010 年代後半からは、隣国南スーダン、コンゴ民主共和国の治安悪化などによりウガンダへの難民流入数が急増しました。道路の改修地域であるユンベ県には２０万人を超える難民を受け入れている居住区があります。12 月の西ナイルは雨季が終わり乾季へと向かう季節です。訪問時にも朝方にはかなりの雨が降っていました。カンパラよりは低地なため少し暑く感じますが、それでも最高気温は 27 度程度。朝夕はカンパラと同じく 20 度を切ります。比較的平坦な土地が続き植生も豊かです。

ヒトとモノが集まる首都カンパラ地域と異なり西ナイルは開発が遅れ現在も問題を抱えています。この地域はケニア、タンザニアからスーダンやコンゴ民主共和国をつなぐ陸上の要衝でもあります。同プロジェクトの道路の改修にはこの地域で暮らす難民の雇用も行っています。東アフリカ全体の統合を進め市場化していくにはこのような地域のインフラ整備が欠かせません。鉄道や税関のシステムを改善しても全体をつなぐようにしないと意味がないともいえます。このように、この国全体の発展と将来を見据えた支援を進めていくのは非常に意味があると考えています。

［現場の様子］

［ウガンダの象徴カンムリ鶴のデザイン］

本件を担当するカトゥンバ・ワマラ公共事業・運輸大臣とともに現場を視察しました。ワマラ大臣は現場で住民との対話も実施されました。住民からは日本の支援に感謝 しつつも事業により地元住民がより裨益するようにしてほしいといった率直な声も聞かれました。

支援実施には日本企業が主体的に関わっています。現地のコントラクター、労働者を監督指導して、効率よくかつ高品質のインフラを整備しています。最近の日本では、日本国内のインフラの老朽化や人手不足の問題に直面しています。現場を指揮する皆さんからは ODA 事業の実施はウガンダの技術者に技術を移転するとともに日本の技術の維持、精度向上にも役立っているとの声を聞きました。

［ワマラ大臣と］

［住民との対話］

５．ワールド・ビジョン・ジャパンの活動

西ナイルを訪問した機会にライノキャンプ難民居住区において教育環境改善事業を行っている日本の NGO (ワールド・ビジョン・ジャパン)の事業地を訪問しました。

ライノには２０万人を超える難民が暮らしており、現在も毎月二千人近い難民の流入が続いています。ワールド・ビジョン・ジャパンは教育課題に対応するため 3 年計画で学校づくり、人づくりを支援しています。

ウガンダ全体でもそうですが難民居住区における初等教育の環境は厳しいものがあります。一校あたりの生徒数は千人を超え、最大のものは五千人もの生徒が通っています。これらの中から小学校 8 校を選び支援を行ってきました。教室には 100 人を超える生徒がひしめいています。生徒数が多く息苦しくなるほどだということでした。また先生も絶対的に数が足りません。しかもウガンダのカリキュラムは厳しく小学校は中学年になりますと朝 8 時から午後 5 時までみっちりとカリキュラムが組まれています。

ワールド・ビジョン・ジャパンではまず物理的に校舎やお手洗いの改修を進め教員の育成も行っています。基本的な教材を揃えることも支援しました。教育の問題は一朝一夕に改まるというものではないと思います。子どもたちも学校だけではなく、家庭環境も改善しないと全体としては伸びないかもしれません。しかし、訪問した学校の子どもたちは学んだことをしっかりと身に付け初めているようでした。長期的な取り組みとなりますが、国づくりの基礎とも言える人づくりも重要な分野です。

［供与された教材。日本人職員の古徳さんと］

［オープニング］

［教職員、生徒と］

［歓迎の様子］

６．ウガンダのスタートアップ支援の輪：トロント・メトロポリタン大学 DMZ との協業

筆者の前任地はカナダのトロントです。トロントは「北のシリコンバレー」とも称されるほど IT 研究、スタートアップ支援が盛んです。

トロントのメトロポリタン大学もスタートアップ支援組織である DMZ を擁しています。

DMZ は日本のスタートアップとの連携も多く行ってきており筆者がトロント総領事の時にも多くのコラボレーションを行ってきました。DMZ は中東やアフリカのスタートアップとの連携にも熱心です。今月は DMZ 日本事務所所長である並木由美子さんがウガンダを訪問しました。

このコラムでも紹介してきましたとおり日本人の起業家はすでにウガンダで活躍しておりさらなる発展を視野に入れています。ウガンダ人技術者も徐々にですが人材養成が進んでいます。AI も有望な分野です。JICA の専門家の方も交え熱心な議論が交わされました。良いネットワーキングの機会になったと思います。

［DMZ 日本事務所並木所長とウガンダのスタートアップ関係者の皆さん］

（以上）